様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ９ 月 ２７ 日現在

機関番号：２３１０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５８６２２２９

研究課題名（和文）術後補助化学療法を受ける慢性疾患をもつ高齢がん患者のセルフケアに関する研究

研究課題名（英文）Study about self-care of the old cancer patient who with chronic disease given foreign adjuvant chemotherapy.

研究代表者
角山　裕美子（TSUNOYAMA, Yumiko）

新潟県立看護大学・看護学部・非常勤講師

研究者番号：３０４６０３３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：外来補助化学療法を行っている慢性疾患をもつ高齢がん患者のセルフケアを明らかにすることを目的に、計画に則り実施した。まず、外来化学療法を行っている高齢がん患者に関する試験的な調査を実施した。外来化学療法を行う高齢がん患者は近年増加傾向にあり、そのなかでも慢性疾患として高血圧症といった疾患が多く見られた。セルフケアの様相としては、がんという病と対峙する思いをもちながら、今まで行ってきた体調をコントロールする術を活用していた。さらに、治療に伴う副作用などの出現症状に対する症状マネジメントを行いながら生活を営み、治療継続のためにさまざまなサポート源を活用しながら生活を調整していた。

研究成果の概要（英文）：For the purpose of determining the self-care of older adult patients with cancer with chronic disease given foreign adjuvant chemotherapy, we performed it in conformity with a plan. At first we conducted the experimental investigation about older adult patients with cancer given foreign chemotherapy. In late years the older adult patients with cancer given foreign chemotherapy were in the tendency to increase, and disease such as hypertension was frequent as chronic disease in that. We utilized an operation to control the physical condition that we performed so far while having thought to confront the illness called cancer for aspect of the self-care. Furthermore, they ran life while conducting the symptom management for the onset symptoms such as side effects with the treatment and adjusted life while utilizing various support sources for treatment continuation.

研究分野：老年看護学

キーワード：高齢がん患者　セルフケア　外来化学療法

１．研究開始当初の背景

近年の化学療法における進歩に伴い、外来治療の充実が促進し、高齢がん患者であっても在宅での療養生活が送れるようになってきている。安心した療養生活を送るには、高齢がん患者が外来通院を維持できるように、患者のセルフケアの状況に合わせた教育、支援など多様な需要に対応していかなければならない。

化学療法に関する研究は、副作用に関する苦痛やそれを解決するための方略、セルフケアや日常生活に焦点を当てたもの、役割遂行に焦点化した研究がある。いずれも、60 歳代までの成人期を対象としており、高齢がん患者に焦点を当てた研究は乏しい状況にある。

高齢がん患者は加齢による変化と治療による変化を同時に対処していかなければならない状況であるといえる。さらに、高齢がん患者ががん以外のほかの慢性疾患を有する可能性は成人に比して高い割合であり、高齢がん患者の広範囲なアセスメントの必要性と症状マネジメントを計画していくべきであると考える。

以上より、外来化学療法を受けている高齢がん患者に特化した国内の調査研究は少なく、老化とがん疾患とを併せ持つ高齢者が、化学療法による症状の管理、さらには加齢により併発する慢性疾患の症状管理をどのように行っているのか明らかにされていない。

２．研究の目的

術後補助化学療法を受ける慢性疾患をもつ高齢がん患者が、化学療法を遂行する上でセルフケアをどのように行っているのか明らかにすることである。

３．研究の方法

1)研究デザイン

質的記述的研究デザイン

2)対象者

術後補助化学療法を受けており、慢性疾患をもつ 70 歳以上の高齢がん患者。
がん疾患は、高齢者の罹患率が高い消化器系がんとし、外来化学療法は術後補助化学療法として受けており、2 クール目以降行っている患者とする。がんの合併症による明らかな症状がなく、日常生活がほぼ自立しており、言語的に意思疎通が取れる者とする。慢性疾患は、患者のセルフケアが重要となる生活習慣病等（循環器疾患など）とする。

3)調査方法

初年度は、外来化学療法を受ける高齢がん患者のセルフケアの全体像を把握するため、試験的調査を行う。次年度以降は、本研究の対象となる患者の選定を行い調査していく。

(1)対象者の選定

化学療法に従事する研究協力者（看護師、主治医）へ対象者の選定を依頼し、インタビュー調査に耐えられる心身の状態である患者を選定してもらう。その際、対象者の病状説明内容や理解度、治療経過等の情報提供してもらい把握する。

(2)対象者への調査内容

①　基本属性

基本情報は、診療録より情報を収集する。基本情報は、年齢、性別、家族構成、キーパーソンを収集し、そのほかに治療の状況として診断名、治療経験（診断名、術式、手術日、化学療法の施行回数、術後経過に関する情報等）を診療録と研究協力者より情報を得ることとする。対象者へのインタビュー前にそれらの情報収集を行っておき、対象者の状況を把握しておく。

②　インタビュー調査

インタビュー調査では、半構成的面接法で対象者のセルフケアに関する情報を収集する。インタビューは、(ア)～(ウ)の手順で進める。インタビューは研究者１名が担当する。

(ア)対象者への研究依頼は外来通院時に研究に関する説明を研究者または研究協力者が書面と口頭で行い、研究参加に同意の得ら

れた対象者には、対象者の体調が安定している時期に都合に合わせて面接日を決定する。面接日は、原則として治療がないインターバル期間を設定する。

(イ)インタビューは、個室に準じたプライバシーの保てる場所で、1 回のインタビューの時間は身体的・精神的負担を考慮し、1 時間以内とする。その際、体調管理には十分配慮し、気分が悪くなった場合等すぐに対応できるようにしておく。

(ウ)インタビューは、インタビューガイドに沿って行う。インタビューガイドの内容は、疾患・治療に対する認識，現在の身体状況の認識，身体的・心理的・社会的に安定を得るために行っている自己管理方法，日常生活の変化，療養生活に対する思い　についてである。回答に制限を設けずに問いかけ、できるだけ具体的に自由に語ってもらう。インタビュー内容は、対象者の同意を得て IC レコーダーに録音し、逐語録を作成する。

(3)研究期間　平成 25 年 4 月～2 年間

(4)調査場所

調査場所は、新潟県および山形県におけるがん診療連携拠点病院 2 か所で行う。

4）分析方法

質的帰納的手法を用いた。逐語録を作成し、それを繰り返してよみ、語りの意味内容に基づきながら、患者の思いに着目してコード化する。次いで、類似性と相違性を比較しながらサブカテゴリ、カテゴリーへと抽象度を高め分類する。分析過程においては、研究協力者と相互に確認を行いながら分析を行い、老年看護学における質的研究の専門家からスーパーバイズを受け、要素の抽出およびカテゴリーの妥当性について検討を重ねる。

5)倫理的配慮

本研究は、A 大学の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。さらに、調査協力機関であるがん診療連携拠点病院 2 か所の倫理審査委員会の承認を得て行った。

対象者への研究参加依頼は、まず、外来化学療法室で従事する看護師および主治医に心身の状態で協力が依頼できる者を選定してもらった。その後、がん化学療法看護認定看護師より協力依頼の説明を行ってもらい、同意が得られた者に対して、再度研究者より文書と口頭で説明を行い、研究参加に同意が得られた者を研究対象者とした。実施にあたっては、研究の目的と方法、参加と中断の自由、匿名性と守秘性について文書と口頭で説明を行い、書面にて同意を得た。

４．研究成果

（１）試験的調査による成果

初年度は、外来化学療法を受ける高齢がん患者のセルフケアの全体像を明らかにするため、外来化学療法を受けるストーマ造設後の高齢がん患者の高齢がん患者のセルフケア行動に関する事例検討を行った。その結果、外来化学療法を継続するために、家族などのインフォーマルなサポート等多くのサポート体制により支えられながら、セルフケアを行っていることが明らかであった。高齢がん患者のセルフケアを支える看護としては、治療者というより生活者として大切にしている感覚を尊重しながら、個々の患者の強みが活かせるようなかかわりが求められると考えられた。

（２）本調査による成果

次年度以降に分析した結果として、以下に示す。本研究の対象である術後補助化学療法を行っている高齢がん患者は、経口薬による化学療法が主であったため、予定数を集めることが難しい状況であった。

外来化学療法を受ける高齢がん患者のセルフケアに関する成果として以下に示す。

1)研究対象者の概要

研究参加者は、外来化学療法を受けている高齢がん患者で同意が得られた 9 名（男性 4

名、女性 5 名）で、平均年齢は 76.4 歳、外来化学療法継続期間は3ケ月～5年であった。消化器がんの原発疾患は、大腸がん、胃がん、胆管がん、乳がんであった。併存する慢性疾患に関しては、高血圧症、糖尿病、ぜんそく、前立腺肥大症があった。高血圧症が最も多く、6 名が罹患しており、投薬治療を続けていた。

家族構成としては、配偶者のみの世帯が４名と最も多く、次いで、子との同居、独居がいた。配偶者のみの世帯は、高齢がん患者の配偶者であり、老夫婦の世帯構成であった。

介護保険サービスを利用している者は 9 名中 2 名おり、要支援 1、要介護１であった。要支援１の者は訪問介護サービスを利用しており、要介護１の者は訪問介護サービスと通所介護サービスを利用していた。

2)セルフケアの様相

外来化学療法を受ける高齢がん患者のセルフケアでは、≪支援を受けながら治療を続ける≫、≪考え抜いた自分ができる精一杯のケア≫、≪出現症状の対処方法の工夫≫の３つのカテゴリーが生成された。

≪出現症状とともに生活する≫という薬物有害事象等の出現している心身の症状に対して試行錯誤しながら個々に工夫し、さまざまな症状と折り合いをつけながら生活していた。また、治療により体力の低下から＜副作用症状出現に伴う生きがいの模索＞もみられ、生の実感や社会とのつながりにより感じる生きがいについて、変更を余儀なくされることや、体力との関係などを考慮し折り合いをつけていると考える。

≪治療を継続していくための対処≫としては、＜治療継続のためのサポートを得る＞では、介護サービスなどのフォーマルサービスの利用やインフォーマルなサポートにより治療が継続できており、年金生活者がほとんどである参加者にとって＜治療継続に伴う経済的な負担感と倹約＞を行いながら、さらに参加者自身の基礎疾患の治療等を行いつつ、計画された外来化学療法の治療が継続できるように対処していると考えられた。

≪体調のコントロール≫では、今までどおりの自身の心身の健康状態と比較し体調を判断しながら、習慣となっている感染対策を行い、治療が受けられるようにコントロールしていると考えられた。

以上より、外来化学療法を受ける高齢がん患者のセルフケア支援において看護者は、副作用などの出現症状に対する症状マネジメントに関する看護ケアだけでなく、患者を支える存在に対して関心をもって把握し、支援が継続されるように見守っていく姿勢が必要であると考える。今後は、高齢がん患者の個別的なセルフケア支援をどのように構築し継続していくか検討する必要がある。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 3 件）

・角山裕美子，原等子：外来化学療法を受けるストーマ造設後の高齢がん患者のセルフケアに関する事例検討，第 33 回日本看護科学学会学術集会(平成 25 年 12 月 7 日大阪)

・角山裕美子，原等子：外来化学療法を受ける高齢消化器がん患者のセルフケアに関する研究，第 35 回日本看護科学学会学術集会（平成 27 年 12 月 5～6 日広島）

・角山裕美子，原等子：外来化学療法を継続するために在宅サービスを受けている高齢がん患者のセルフケアに関する研究，第 30 回日本がん看護学会学術集会（平成 28 年 2 月 20～21 日千葉）

６．研究組織

(1)研究代表者

角山　裕美子（TSUNOYAMA　Yumiko）
新潟県立看護大学・看護学部・非常勤講師
研究者番号：30460330